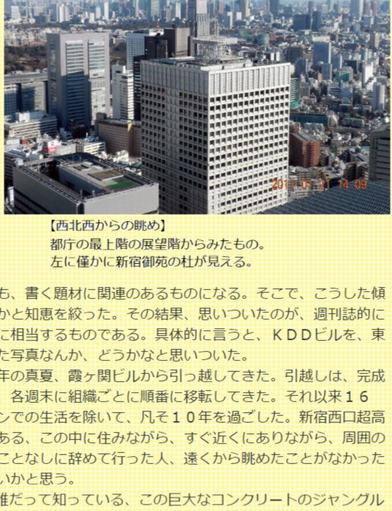
樫村　慶一

東西南北から眺めたＫＤＤビル



【西北西からの眺め】
都庁の最上階の展望階からみたもの。
左に僅かに新宿御苑の杜が見える。

我々の懐かしき故郷、命の炎を燃やした場所であり、今の、安穏な生活の礎を作ってくれた、わがＫＤＤビル。（我々の時代にはＫＤＤＩビルは存在しなかった）

昨年暮れに約１年振りに「四季雑感３１号」を出した。年が変わり、なにか書きたくなったものの、四季と名乗っている以上は、やっぱり、節季を意識しないといけない。間隔が近すぎるので、番外として書いてみようと思った。とは思ったものの、なにか気分の変った題材はないかと考えた。K-unetの記事に添付される写真はどうしても、書く題材に関連のあるものになる。そこで、こうした傾向ではないやり方はないものかと知恵を絞った。その結果、思いついたのが、週刊誌的に言うと、冒頭のグラビア写真に相当するものである。具体的に言うと、ＫＤＤビルを、東西南北の高いところから撮った写真なんか、どうかなと思いついた。

１９７４年７月、昭和４９年の真夏、露ヶ関ビルから引っ越してきた。引越しは、完成したこの年の１月から始まり、各週末に組織ごとに順番に移転してきた。それ以来１６年、途中、出向やアルゼンチンでの生活を除いて、凡そ１０年を過ごした。新宿西口超高層ビル群の草分け的存在でもある、この中に住みながら、すぐ近くにありながら、周囲の高層ビルの中へ入ったりしたことなしに辞めて行った人、遠くから眺めたことがなかった人などは意外と多いのではないかと思う。

“東京の新宿”、日本人なら誰だって知っている、この巨大なコンクリートのジャングル街の中に我々は毎日毎日いたのだ。また退職してからも、新宿へはちょこちょこ行ったりしているのに、まだ行ったことがない場所は数え切れないほどあると思う。しかし、いつも力メラを持っているので、東西南北のどこかの一角の、高い場所に行った時には必ず写すようにしていた。そんな写真をアルバムから拾い集めてみた。距離はそれぞれ違うけど、いつ、どこから眺めても懐かしい建物である。

でも翻って見ると、そこは、常に戦場であったし、ある時は憩いの場にもなり、独占時代は世界のＫＤＤマンであると、胸を張って新宿界隈を闊歩した。更には、去ったあとの余生を安穏に過ごせる、貴重な糧（かて）を与えてくれる、後光の射すような、このＫＤＤビルを、「遥かに眺むる我が懐かしき故郷」、なんて懐メロ調のタイトルにしては、ばちがあたるかもしれない。

“なんだ、ここからなら知っているよ”、と思われる方もいるだろうし、“へええ”、と思われる方もいるであろう。評価はご覧頂いた方々の自由である。本音はk-unetの記事にちょっとだけ、一輪の花を添えようと思ったからであると同時に、ＣＭ的に言わせて頂くと、これからも「四季雑感」を是非ご愛読頂きたいということでもある。　(2016.1記)

【西北西からの眺め】
都庁の最上階の展望階からみたもの。
左に僅かに新宿御苑の杜が見える。

【南からの眺め】
渋谷の井の頭線ホームの上にできた渋谷エクセルホテル
東急２５階からの眺め。随分高層ビルが建っているが、
なぜか、真っ白な清楚なビルは、KDDビルだけだ。
（ズームを使用）

【南からの眺め】
ズームを使わない風景。こうしてみると、高層ビルは、
左端の都庁と右のNTTのひょろひょろビルの間に集約
されているように見える。
手前のラグビーのゴールのようなものは、代々木体育館、
その先の杜は、殺人蚊騒ぎが起きた外苑公園。

【北からの眺め】
高層ビルの中でも古手、新宿センタービル５４階の
焼肉料理店（名前失念）からの眺め。
背景の杜は明治神宮の森

四季雑感　　(23)

樫村　慶一

モニュメントと松は2013.3.1撮影：KDDビル建設後39年経ったが、当時の松か植直したのか広報に聞いたが分からないと回答が来た。

スマホの場合は、こちらをクリックして拡大してご覧ください。

今年はKDD創立60周年です。
昔のことを一緒に思い出してみませんか

　ああ、あの頃のことが、KDDが出来たのが、もう　60年も昔のことになってしまった！。
私は、人一倍古いことへの愛着が強い人間なのかもしれない。すべてのことについて、昔のことが懐かしい。もっとも懐かしいことがない人などはいないとは思うけど。私にとって懐かしい時代を年代で言えば、生まれていなかっただけに憧れに似た憧憬がある大正時代に遡るが、実際に記憶の領域にあるのは、5歳位になった昭和１０年頃からのことである。昭和11年の2.26事件はなんとなく覚えている。懐メロは昭和30年頃(1955)までの歌じゃないと、私の懐メロのカテゴリーには入らない。でも今じゃ、昭和40年代（1965～1975年まで）の歌も40年以上も経った立派な懐メロになった。
　KDDが今年創立60周年になるということを、昔を知っている人に会う度に言うが、異口同音に"ふーん、そんなになるかー"で終わりだ。拍子ぬけがしてしまう。私は、k-unetになにか特別なイベントをやってもらいたいと思うのだが、世話人も皆若返りしてしまったためか、乗ってもらえそうもない。50周年の時は自分が世話人だったこともあるが、他の世話人さんも50周年を祝う気分に満ちていた。ホームページの表紙を特別仕様の画像で飾ったり、募集した投稿文も沢山集まった。でも60周年の今回はムードが全く沸かない。時代は変わったのだ。やむなく自分で出来ることを考えた。それは、このウエッブ・サイトの中で、自分で裁量できる「四季雑感」欄を活用し、特別に作った動画アニメを掲載することである。この欄と合わせて一度是非見て頂きたい。

　K-unetの会員名簿を見てみたら、60年前に当時の電電公社から新会社KDDに移ってきた人は40人くらいはいる。私は23歳だった。現場上がりの私には本社の人事構成は知らなかったが、KDDができてから最初に大学を卒業して入社した人は、創立翌年の昭和29年に入った技術屋の横井寛さんとk-unetの初代代表の石川恭久さんであり、業務屋のトップは31年に入った、先日亡くなった小熊忠三郎さんと、佐々木哲夫さんだった。この方達は、"給料が３回も出た"と言う感激は味わっていない。60年前に存在し、かつ今も健全で当時のことをなんとか覚えている"私"というのは、少しは凄いことなんだと自尊している。まだどうにか覚えている60年前の出来事の中から、前号の「四季雑感（22）」の二番煎じにならないように気をつけながら、今では考えられないようなことを拾って見た。思い出すままに書いてみたが、知っている人が読んで間違っていることがあったら、どうぞ指摘して頂きたいと思う。

【退職金の行方】
　会社になったとき、KDD社員は皆電電公社を退職してきたので、退職金と、一部の人を除き電電共済会の脱退金がでた。私は電電公社の在職が5年だったので、退職金は11万円余りだった。昭和28年の11万円はかなりの値打ちがあった。母親達と住んでいた千葉市の戦時中の軍需工場社宅のボロ家がすっかりリフォームできたのだから。当時の電電公社職員は国家公務員であり、厳然たる身分制度による階級社会であった。無線通信士の１級とか国際電話交換手などは、６級とか７級職でかなり上の地位だったし、外信課で国際通信に従事するのに絶対に必要な資格、特殊無線技師国際級だと５級職とか、職級で給料が決まっていた。７級職くらいの人の退職金は３０万位だったと記憶している。そして、福利厚生の対策もかなりのスピードで進み、社宅の建設と併行して住宅資金貸付制度も出来、誰でも25万円が簡単に貸してもらえた。地方出身の人が多く、退職金と合わせて大勢の人がマイホームを建てた。今は余り形態が残っていないと思うが、三鷹の下連雀にはKDD村ができた。概して中央線沿線とか西武線、小田急など、なぜか都下の西の方が好まれた。こうした中で、Tさんと言う豪傑は、新宿2丁目（明治通りを挟んだ伊勢丹の東側の一角、昔は新宿2丁目だけでどんな場所かが分かった）で、退職金がなくなるまで居続けたと言う逸話もあった。確認した人は誰もいなかったけど。

【輪番の夜の楽しみ】
　昔の輪番は３番勤務と言って、「宿直～明け～日勤まとは休み」の繰り返しである。宿直は前徹・後徹の交代制で、前徹は午前2時半まで勤務、後徹は午後１０時から寝て午前２時半から翌朝9時までの勤務である。しかし私は、すぐには寝付けないたちなので、起床時間をきにしいしい寝返りばっかりを打っていた。昭和30年(1955年）大手町新局舎ができソファーが置かれた立派な休憩室ができた。夜中はこの休憩室が眠らない連中の賭博場と変わり、丸テーブルを囲んで博打もどきの遊びをやっていた。なにをやったのか忘れた部分も多いのだが、ポーカーとか、１円硬貨の裏表を当てる丁半博打だったように覚えている。掛金は硬貨や食券だったと思うが、すでに忘れてしまったことが多い。１円硬貨をピース（たばこ）の缶に入れて持ち歩き、職場でも仕事をしながらやっていた。禁止命令が出たのは大分後のことで、きっかけは、休憩室の丸テーブルの縁に煙草の焦げ跡が沢山ついているのを不審に思った夜間責任者が夜中に見回り、開帳中のところを御用にしたというわけである。今の人には信じられない話だろう。日勤の昼間の休憩室は野球中継を聞くものが多かった。あの頃はプロ野球の西鉄ライオズ（今の西武）の全盛期で、鉄腕稲尾が大活躍するのを興奮して聞いていた頃でもある。ナイターはまだ始まっていなかったのかどうか覚えていない。

【不祥事のかずかす】
　庶民俗人ばかりが集まった国際電報局には、当然ながら世間並みの不祥事もあった。鍵のかかっていないロッカーから現金や金券（食券）を盗んだ人とか、京浜東北線の通勤電車の中で痴漢をやっ人などは警察沙汰になったと記憶しているが、都内の営業局における現金蒸発事件とか、別に犯罪ではないが、競輪に狂い周囲から借りるだけお金を借りまくり、給料差し引きで食券を買い、それを直ぐ売って現金にする人がいたとか、大分後の話ではあるが電話局の交換手のベッドに侵入したが未遂？だったので温情で依願退職扱いになった豪傑の話などは、内緒で始末されたように思う。ただ寡聞にして、或いはまだ道徳心が世の中に健在だったためか、女性がらみの不道徳（背徳）な話は聞いたことがなかった。ましてや、新聞ダネになるようなことは皆無で、悪いことで新聞を騒がせたのは、恐らく1979年（昭和54年）のKDD事件が初めてだったのではないかと思うのだが。

【休日出勤を巡る贈収賄騒ぎ】
　休日に出勤すると手当がついた（今でもそうかもしれないけど）。これが馬鹿にならない金額だ（額はすっかり忘却）。昼間の休日出勤だけでも結構な額になったし、宿直に当たろうものなら宿直当日と翌日の明け番とで、１勤務で２日分にもなった。そのため、皆が出勤したがったので、課長が記録簿をつくり公平に当たるように采配していた。そこを裏口から接触して有利に扱ってもらおうとするずるい奴がいた。ちゃちな贈収賄事件である。中でも旧陸軍の将校上がりで要領の良い奴がいて、派手に袖の下を使ったと言う話は、多くの人が知っていることであった。年末年始やゴールデンウイークなどは、うまく当たれば絶好の稼ぎ場で、次の給料が楽しみだったのである。

【宿直明けの自由な人生】
　若いということは本当に素晴らしいことだ、80を超えた今になって、つくずく昔の体力が懐かしい。宿直勤務でも一応眠る時間はあった。前徹は午前2時半までが仕事でそのあとは朝まで眠れる、後徹は、先にも書いたが、午後10時から翌午前２時半まで眠る時間がある。しかし、寝る時間が早すぎるし若い体が十分に睡眠を取るには短すぎるので、とても眠れるものではない。したがって、翌朝になると、殆ど寝ていないも同じ状態なのだが、一向にへこたれないから、若いってよかったな、と懐かしむわけである。
　宿直明けの自由な時間に大学へ行く人、競輪とか競馬とかのギャンブル場へ行く人、がめつく別の仕事を持っていて、そこへ急ぐ人などなど、私の周りの人達で、家に帰って眠るなんてことを言う奴は、役職者のロートルを除いてはいなかったように思う。そして私は仲間と神田駅近くのパチンコ屋へ急いだ。10時の開店時には戦時中の行進曲「軍艦マーチ」が鼓膜を破らんばかりにがなり立ている。終戦から10年も経っていない時代（前年に占領から解放され漸く主権を回復したばかりの1953年頃）では、昨日まで聞きなれていた勇壮な曲である。それから12時間、昼飯抜きで立ったままで玉を弾いていた。顔には脂汗が浮き、煙草をやたらに吸いながら打つので、口はカラカラ、喉はいがらっぽく、さすがに腰もしびれてくる。よくそ病気にならなかったものである。いつも遊ぶ資金の調達が問題になった。神田駅のすぐ近くに顔馴染みになった質屋があり、仲間と順番に腕時計を質入れして、その金を分配して助け合って？遊んでいた。

　思えば遠い遠い昔のことばかり。空襲で街も学校も焼けてさまよい、食うためにやっと掴んだ通信屋の道が、将来どうなるかなんて全く考えもせず、また先行きに特別な希望も持たず、ただその日その日を好きなように過ごしていた時代である。ただ、それまでの電電公社よりは、"なんとなく良さそうだぜ"とはみんな思っていた。ゴルフでは、"たら、れば"は禁句であるが、今にして思えば、昔のことは、たられば話ばかりの日々であった。だからこそ、懐かしいのかもしれない。
　今年は４月に桜がないと言う異常な年になりそうだ。桜は入学式の花ではなく卒業式の花になってしまったようだ。地球規模の異常気象の始まりかもしれない。大きな地震や噴火の説を聞けば"霞か雲か　見渡す限り・・・"などと言う、のたりのたりした気分にはとてもなれない。残りが少なくなったのは幸せかもしれない、などと、とり止めもないことを考える。おわり（2013.4 記）